

〈紹介〉イエーア：児島湾における国土開発

大谷，成男

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

1956-05-01

紹介

イエーア：児島湾における国土開発

Japanese Land Development in Kojima Bay
{John D. Eyre}

Economic Geography Vol. 32, No. 1, pp. 58-74.

January 1956

大谷 成男

本稿は「児島湾の水田開発は、日本における平地を確保するために行われた。過去および現在にわたる浚渫地、浅瀬の干拓についての重要性を刷証している」という序文に始まり「如何なる力が過去様々な時期に干拓を刺激したか、如何なる手段によつて行われたか、干拓上の主たる自然的障害は何であつたか、またどの程度の成果が上つたか、干拓地に建てられた経済的様式の一般的特徴は何であるか」という問題を提起して論を進められている。始めに自然環境の一般的記述があるが省略する。

開拓の時期 初期の開発 岡山平野の農業開発は凡そ2000年以前に始まる。此証は先史時代より人類居住の地であり（古代遺跡による）、米の導入は更に人間活動の中心たらしめ、初期開発には少数の南、北、支那移民の参加もあり、大陸より進歩せる灌漑技術をもたらしめたこともあつた。條里の跡は今もなお残され、平野中央および東部は既に稲作に農地として固められていたことを示している。更に瀬戸内海の東端にあつた当時の首府と東支那沿岸とを往復する船舶の主要停泊地という位置的優越性を此地の価値を高めた。

封建時代の干拓 中世期は海面への進出である。中世における断続的な戦争は、時には農業活動を妨げたが、次第に増える人口が原野を生産的な水田に変えることを要求し、17世紀に入つて徳川一族の封建的秩序による平和の招来と共に、注意は新しい源泉として児島湾の浅瀬に向けられた。そして干拓地開発の最初のものは宇氏直家によつてなされた。1600年以後、多くの大名は徳川家による転封、新封、参勤交代、公共事業への寄附のために弱められた勢力の回復策として、経済上の改善（其らは運幣、米作の地積と商業活動の拡張、農業製造業、特殊産物の奨励、を含む）に努めた。児島湾の干拓もその一つの例証と考えられるものである。17世紀になるまでに湾の西端と瀬戸内海をつなぐ瀬戸海峡が河川の埋積作用でふさがれ、湾内

潮流の速度の減少により、内海の埋積は更に進んだ。60年間に $\frac{3}{4}$ の水田を含む1000エーカーの土地が岡山平野に加えられた。次に旭川の西方2000エーカーの細長い土地が干拓され、更に4350エーカーに及ぶ旭、吉井両川の間の地が、湾の西端にある1840エーカーが干拓された。近代の事業、近代における干拓事業は1868年末、二つの団体(藤田組と政府)の手によつて行われた。後者の一つは明治新政府による、没落した武士階級の授産事業として、もう一つはオス又世界大戦後の復員軍人救済策に食糧問題のために行われた。藤田組の先づ打当つた困難は、湾内漁業者の反対、洪水への恐怖、船舶関係者の反対、又農業者にあるところの水の供給、排水に対する多くの困難等々である。併し之らを克服して工事は進められた。

以上近代末期の干拓までの要実は、

- (1) 干拓は継続的に行われたのではない。
- (2) 干拓の計画、融資、経営は政府商人の手で扱われ、農民自らの手で扱われたのでわなかつた。之は水田構成の複雑性と自然障害の規模が大であつたことを示している。
- (3) 成功せる干拓は改善された工業技術によつて上記自然的障害を低減或いは根絶したことによる。

◇水の問題 干拓地の水不足は、農民の困窮と生産力の著しい低下を来した。この原因は岡山平野西部の大部分の水田に供給している高梁川に依存し過ぎることである。即ち、湾近くに達するまでに河水は、他の水利組合によつて消費盡されてしまう。この被害は例えば1924年、1939年の如く平年作の年の收穫である。この解決策として藤田組は干拓地中に巨大な矩形の貯水池を設けることにした。が下方から浸出する塩分が再びこの水を灌漑用水として使用することを妨げた。開拓後40年の後に於て是れ地表面下に塩田の存在していることが実証されている。しからばこの給水問題を恒久的解決策は如何にすべきか、それは旭川西方の児島湾残存部分を淡水湖に変えることである。11の大水門によつて調整される潮の水面は東方の海面に対して氾濫期に80cm、他の時期に50cm高くなる。ガムの完成後塩水湾は、流入する諸流と西方よりの小川の水によつて淡水に代るであろう。湾の入口を通るガム建設は既に進行中であり、1956年完成後には2700エーカーの水面をなすであろう。そしてこの水は最後の干拓計画(オ6、ク区、最も湾際の地区)に供給せられ、12600エーカーの土地の食糧増加は264500ブッシェルの米と55400ブッシェルの穀類に変わるであろう。また潮水は瀬戸内海沿岸にある宇野周辺の工業地に送られる工業的効用も

考えられる。しかし家事用水の給水問題は未解決である。即ち干拓地内縁に沿って掘られた小数の井戸は、余り遠すぎるのと、所有権に料金をとられることにより、使用せられず、大部分は、トビヤ氷こし器や貯水タンクに貯められた天水を利用しているに過ぎない。之が為に通玄藤田組は児島半島より水船の一隊を組織して送ったが1940年には廃された例もある。

◇藤田村 藤田村は他の児島湾干拓地と異った二つの特徴を持っている。一つは1947年の土地改革まで全村および附加的隣接所有地は藤田組によつて所有され運営された、このことは日本において一団体が保持した最大の農地であつた。その二は本村および興除村は集約的手耕作によつて代表される日本の中で、最も高度に機械化された農業地になつたということである。前者について、1912年の藤田村は二つの異つた形で運営された。① 2000エーカーの土地が会社直営農場として耕作され、小作組織によつて、3~6エーカーの割当がなされた。藤田組は彼等の投資額を出来るだけ速やかに回収すべく、小作者に対し、苛烈な搾取経営策が取られた。一割を挙げると収穫の60%が会社に納められた。之に対し全国農民組合をバックにする地方農民団体を始め、各種の反抗運動が行われたが1947までその支配権は保たれたのである。

②も1000エーカーの土地が日雇い労働者を使う直営農場として継続的に運営された。オス本大戦中に学校児童と婦人団体が愛国運動として之に従事し、地方農民団体は県庁筋を動かして所有地の一部を小作乃至自作農に売却せしめようとしたが、成功しなかつた。1947年以後は土地改革によつて政府の手に勝られ、更に小作人、引揚者、復員軍人の手に売却されたのである。

この様に極占搾取の悪い面と反対に、彼の貢献も忘れてはならない。それは農業機械の導入による西歐式農耕技術の応用である。初めの機械は1909年U.S.Aから輸入された。第一に自動耕耘機次いで、電動機、ガソリンモーター、其の他が加えられた。藤田村の古参者は一台の自動耕耘機を五人一組で分担した。(しかし新参の資力のないものは躊躇ぎめで賃借したものもあつた。)更に隣の興除村が機械化農村に変わった。その例を挙げると1953年には1210世帯に648台の耕耘機、992台の脱穀機、121台の畑耨機、1124台のガソリン発動機、1047台の電動機があつた。そしてこの傾向は広く岡山平野中に広まつた。農業機械化政策は政府に受けつがれ最新計画には、耕耘機を4世帯毎に一台、或いは16エーカー毎に一台、脱穀機一台、畑耨器一台、三輪オートバイ一台を与えることになっている。も

し之が實現され、はる大の成果が期待される。

◇干拓地の土地利用 湾周辺地区の主要作物は米であるが、前述の水不足と土壌中の塩分のために、生産額は平野の部分よりも低い。又畑地が極少のため、野菜は泥島半島に依存している。現在でこそスモ作が標準であるが、過去に於いてはそうではなかった、即ち小春の低価格と、茅額の小作料が農民に裏作の利益を保證しなかつたのである。しかし1940～41年にかけての政府の穀物強制供出制度がスモ作を促進させた。又蘆葦の竹草が有利な現金作物として作られている。最新干拓地として進行中のうち、リ地区は水不足の故に乾燥栽培が支配的であるが、やがて淡水湖の實現によつて、隣接諸地域に類似した土地利用様式がとられるであらう、また一方400エーカーの土地に綿の栽培が行われているが、之は封建時代における様式への逆戻りとして興味ある現象である。以上要するに新しい干拓地に於ける農業は、現在が二義的な重要性を有しているにすぎない。入植者は新しい土地に、自らの家は建て、いるが淡水湖の實現までは、彼等の収入は干拓の仕事に依存しているのである。

◇干拓地域の工業的効用 旭川の西岸に接する広大な干拓地域が岡山市の工業発展の爲にとつて置かれた。この干拓地は戦時中の軍用飛行場と軍需工場のために、水田として使用することは不可能になつてゐる。1950年16万の人口をもつ岡山市は、岡山平野、岡山縣両着の指導的都市であり、工業の中心地である。又従来より、綿、人造纖維の工場、様々な消費小企業に惹きつけられて来たが、新しい工業地域の発展に當つて果樹は、市の工業経済に変化を与える大企業の誘致を企図した。そして此処に人造纖維、化学、面工場が設立された。一方湾の前面には製氷工場、冷凍貯蔵設備を設けた。その地域の残余部分は、調整に充てられ、その新工場を收容することが出来る、新工業地域には有利ないくつかの点をあげる事が出来る。それは、

(1) 位置

(2) 周辺地区にある阪神地方より多い農村余剰労働力。

(3) 旭川の上流にある二つの大規模な茅目的ダムの完成が近づくと共に、水の困難が改善されること。

(4) 豊富な原動力が、奥地の水力発電所、旭川河口の火力発電所、神戸よりの送電、等によつて得られ、石炭は北九州の鉄道船により運ばれる近距離にある。

更に鉄道は凡ゆる方面に延び、宇野及び新岡山市港にはドック施設も建設

中である。工業地域の一端にある港務施設は現在、毎週20万トンの小船を扱っているが、拡張後は更に5倍に増すであろうし、浚渫することによつて中型の貨物船の入港も可能である。この工業地域西方地域は、住宅街、商店街として新企業の労働者3万を吸収する地域として発展するであろう。

なお筆者はワシントン大学地理学科助教授である。(1956.3.31)

村落社会研究会編：村落研究の成果と課題

1954 時潮社 260頁

今朝洞重美

本書は村落社会を共通の研究対象とする諸分野の学者が夫々の立場において村落研究の既往の業績を回顧批判して今後の課題のあるべき点を明かにしようとしたもので、集落地理学の立場から摘纂されたものではない。従つて書誌の形式も各章各節に亘る内容的紹介を逐一行う方法を止め、あえて筆者が地理学研究者に本書を推せんする所以のものを読後感の形で述べ、特に興味を抱いたノ、エの項についてのみ附随的に簡単な紹介を試みる態度を取った。

さて我が国における集落地理学の研究は昭和10年前後を絶頂とし時代による流行の波はあるとしても、今日に到るまで常に地理学の中の中心的位置を占める事については一應認めても差支えはなかろう。かつて村松繁樹氏は「……集落はひとり地理学研究上の対象たるのみでなく、他の諸科学、例えば史学、経済学、社会学、農学等においても同じくこれを対象として研究している、従つて地理学上集落をその研究の対象とする場合には地理学的な立場から地理学的方法をもつてなすべきである。……」(岩波講座：集落 昭8)と指摘されたが、この地理学の立場から集落をどう取り上げるかについて従来諸家の見解を要約すると云つた立場で代表される。

カノは村松繁樹氏の云う「……集落なるものは地上に打立てられている以上その立っている土地や広く自然の特質によつて制約を受け或はこれに适应している。かくの如くなれば集落なるものは人類と地球表面との間に存続する最も本質的な関係を包括しているのである。これ等諸現象と土地或は広く自然との関係の究明これが集落地理学的研究の本質である。」(岩波講座：集落 昭8)とすなわち集落を環境論の立場から見ると云う立場、オスは鶴賀秀次氏の「……今迄の地誌が取扱つて来た地方の単位が大きすぎた感があつたので